

2020年7月22日付

日刊建設産業新聞 2面

再エネ新活用技術を開発

街中で太陽光発電路面彩る

大林道路ら



左のQRコードから
見える化専用HPに
アクセスできます

大林道路、早水電機工（役）、宮吉硝子（立木彰業（藤井純一代表取締役社長）は、ソーラーパネル内蔵型ガラス「SOLARWAY（ソーラーウェイ）」を開発した。同製品は街中の路面に違和感なく設置できるソーラーパネルで、日中充電した電力で夜間にガラス導光板を点灯させ、余

った電力は携帯電話の充電や照明などの電力として、また、災害時は非常用電源としても活用できる。環境意識が高まる中、一般的には住宅の屋根や郊外の広大な土地に設置されるソーラーパネルを街中の路面に設置し、屋外ミスト（自動打ち水）、イルミネーション、バス停留所、公園の街灯、デジタルサイネージなどの電源として活用すること、再生可能エネルギーの新たな展開を目指す。

同製品は、高透過ガラスをLEDで自発光させることのできる「ガラス導光板」と滑り止め加工を施した「ノンスリップ仕上げ強化ガラス」を組み合わせたものにソーラーパネルをセットした。昼間に蓄えた電気でガラス導光板を発光させるほか、街灯や散水設備の電

源としても使用できる。足元灯として歩行者の視線誘導や防犯対策といった用途にも活用できるので、例えば、駅までの道案内を表示し歩行者はそれをたどって駅に到着できる。LED照明は動きやカラーバリエーションを変更できるため多彩なイルミネーション効果を発揮する。

ソーラー発電のため電気工事の必要がない。大容量リチウムイオンバッテリーを外付けで設置し、不日照を3日間補償する。

今年3月、「都有施設における再生可能エネルギー見える化モデル事業」の一環として、東京ビッグサイト（東京・江東区）の敷地内に12枚採用された。年間想定発電量は約750キロワット時。発電量やCO₂削減量が効果測定され、専用ホームページ（<https://re-mie.ruka.jp/>）で公開されている。

1枚のサイズは1337ミリ×724ミリ、重量70キログラム、価格200万円前後（デザインによる）。